

指定文・措定文・同一性文*

熊本 千明

Specificational Sentences, Predicational Sentences, and Identity Sentences

Chiaki KUMAMOTO

要 旨

英語の(倒置)指定文¹の意味構造を説明するために広く用いられてきたのは、次の二つの考え方である。一つは、倒置指定文を措定文と関連づける考え方(Moro 1997、Mikkelsen 2005、Patten 2012、他)であり、もう一つは、倒置指定文を同一性文の一種であるとする考え方(Heycock and Kroch 1999、Heller 2010、他)である。前者においては、倒置指定文の主語名詞句は非指示的な叙述名詞句、述語名詞句は指示的名詞句であるとされる。後者においては、倒置指定文のコピュラの前後に現れる名詞句は、いずれも指示的名詞句、あるいは、同種の名詞句であるとされる。前者をとれば、倒置指定文と、措定文の倒置形との区別を説明する必要があるが生じ、また、後者をとれば、(倒置)指定文と典型的な(倒置)同一性文との区別を明確にする必要が生じることになる。本稿では、倒置指定文の主語名詞句を、非指示的な「変項名詞句」(西山 1988、2003、2013)であると考えてはじめて、(倒置)指定文の意味構造を十分に説明できるとする立場に立ち、上述の二つの考え方の問題点を指摘する。

【キーワード】(倒置)指定文、措定文、(倒置)同一性文、叙述名詞句、変項名詞句

1. 序

まず、Higgins(1979)、西山(2003)の分類により、基本的なタイプのコピュラ文の例を見ておこう。

- (1) a. Smith's murderer is John. / John is Smith's murder.
b. What John bought was a bottle of wine. / A bottle of wine was what John bought.
(Specificational: (倒置)指定文)
- (2) John is a student. (Predicational: 措定文)
- (3) *John is / That's a teacher who's been helping me with my polynomials.*
(Identificational: 倒置同定文)

(4) *The Evening Star is the Morning Star./ The Morning Star is the Evening Star.*

(Identity: (倒置)同一性文)

コピュラ文を包括的に扱った Higgins(1979)、Declerck(1988)、西山(2003)の議論をもとに、ここでは、それぞれのタイプのコピュラ文を次のように規定することとする。措定文は、主語名詞句の指示対象について、ある属性を帰する文である。倒置指定文は、主語名詞句の変項を埋める値を述語名詞句の表すもの²によって指定する文である。倒置同定文については、述語位置に現れる名詞句が一様ではないため、明確な規定が難しいが、主語名詞句の指示対象を他から区別するために十分な情報を与える文(cf. 熊本 1995)と考えておくことにしよう。(倒置)同一性文は主語名詞句の指示対象と述語名詞句の指示対象の同一性を主張するものである。

それぞれのタイプのコピュラ文に現れる名詞句の意味特性を、Higgins は次のように分類して示した。

(5) <i>Type</i>	<i>Subject</i>	<i>Predicate</i>	
Predicational	Referential	Predicational	
Specificational	Superscriptional	Specificational	
Identificational	Referential	Identificational	
Identity	Referential	Referential	(Higgins 1979:264)

措定文の述語名詞句は性質を表す叙述名詞句であり、世界の中の対象を指示しないという点で、非指示的である。Higgins は、倒置指定文の主語位置に現れる名詞句を superscriptinal NP と呼び、非指示的な性格を持つと主張するが、その明確な特徴づけは示していない。この名詞句は、Donnellan(1966)のいう帰属的用法の名詞句であるとする議論があるが(Declerck1988、他)、Higgins は、両者は別のものであることを正しく指摘している。³

倒置指定文の主語名詞句の意味論的特性を明確に規定するには、西山(1990、2003、2013)の「変項名詞句」の概念が有効である。西山によれば、倒置指定文の主語名詞句は、命題関数 [...X...]を表示する 1 項述語であるという。(倒置)指定文「A は B だ」、「B が A だ」は、次のように規定される。

(6) A という 1 項述語を満足する値を探し、それを B によって指定(specify)する。

(西山 2003:135)

この規定に従い、(1a)の意味構造は、次のように示すことができる。

(7)	Smith's murderer	is	John.
	変項名詞句		値名詞句
	[x is Smith's murderer]		John
	↑		
	指定スル		

倒置指定文をこのように理解すれば、それが措定文の倒置形にも倒置同一性文にも還元でき

ないことは明らかである。同じように1項述語であると言っても、変項名詞句は命題関数を表示するものであり、措定文に現れて属性を表わす叙述名詞句とは、性格を異にする。また、変項名詞句は非指示的名詞句であり、指示的名詞句のように、世界の中の個体を指示対象としてもつことはない。倒置指定文を措定文、あるいは同一性文と関連づける議論の根底には、Higgins のタクソノミーを簡略化したいという要請があるものと考えられる。しかしながら、そのために倒置指定文の本質を見落とすのであれば、それは大きな問題である。以下、倒置指定文を措定文と関連づける議論、倒置指定文を同一性文の一種であるとみなす議論、それぞれの問題点を探ることにしよう。

II. 倒置指定文と措定文の倒置形

次の例が示すように、措定文は、本来、倒置が不可能である。

(8) 太郎が学生だ。/*学生が太郎だ。

(9) John is a student. /*A student is John.

それにもかかわらず、倒置指定文を措定文の倒置形であるとする考え方が出てくる背景には、第一に、(10)、(11)のような例の存在がある。これらは、先行談話との関連により、措定文が倒置されたものと考えられることができるように思われる。

(10) She is a nice woman, isn't she? Also a nice woman is our next guest.

(Mikkelsen 2005:137)

(11) The occurrence of a factive sentence in contexts like (40) and (41) shows that factives do not always have the force of the-fact-that- ϕ sentences. [...]

A philosopher who seems to share the Kiparskys' intuitions on some factive predicates is Unger (1972), who argues that a sentence like (i) entails (ii) ...

(i) John regrets that it is raining.

(ii) It is raining.

[...].

(Mikkelsen 2005:155)

次に、英語には日本語のように「は」と「が」の区別がないため、強勢の位置が示されるか、あるいは、その文が適切な答えとなる疑問文が共に示されなければ、形式だけでは、(倒置)指定文か措定文かという判断が不可能であることが挙げられる。次の例を見よう。

(12) The leader is John White.

(13) John White is the leader.

指定と措定の読みに限るとしても⁴、(12)、(13)はそれぞれ、次の3通りに曖昧である。

(14) a. リーダーはジョン・ホワイトだ。(措定文)

b. リーダーはジョン・ホワイトだ。(倒置指定文)

c. リーダーがジョン・ホワイトだ。(指定文)

- (15) a. ジョン・ホワイトはリーダーだ。(指定文)
 b. ジョン・ホワイトはリーダーだ。(倒置指定文)
 c. ジョン・ホワイトがリーダーだ。(指定文)

(14a)、(15a)は、主語名詞句の指示対象について、それぞれ、ジョン・ホワイトという名前の持ち主である、あるいは、リーダーであるという属性を帰する文である。(14b)と(15c)は同じ意味であり、「xがリーダーである」における変項xを埋める値を、「ジョン・ホワイト」の指示対象で指定する文である。(14c)と(15b)も同義であり、「xがジョン・ホワイトという名前の持ち主である」における変項xを埋める値を、「リーダー」の指示対象で指定する文である。英語のコピュラ文に関する議論では、ほとんどの場合、こうした曖昧性についての配慮が示されない。その結果、(14b)は、(15c)とは同義であっても、(15a)とは同義ではないにもかかわらず、(14b)のように倒置指定文と解釈した(12)を、(15a)のように指定文と解釈した(13)と関連づけるようなことをしてしまうのである。英語のコピュラ文の解釈については、語順以外にも指摘すべき問題があるが、ここで、まず、倒置指定文を指定文の倒置として分析する Mikkelsen (2005) の議論を見ることにしよう。

Mikkelsen は、Moro (1997) の見解に従い、述語の位置にある名詞句がその位置にとどまったものを指定文、主語の位置に繰り上げられたものが倒置指定文であると考え。倒置指定文の主語名詞句は、指定文の述語の位置にあった叙述名詞句であり、非指示的な名詞句であると、Mikkelsen は主張する。その根拠となるのは、(16)、(17)において容認される代名詞の違いである。主語を代名詞化した場合に、倒置指定文では *it / that*、指定文では *she* が用いられる。

- (16) a. The tallest girl in the class, { that / it }'s Molly.
 b. The tallest girl in the class, { she /*it / *that }'s Swedish.

- (17) a. Q: Who is the tallest girl in the class?

A: { That / It }'s Molly.

- b. Q: What nationality is Molly?

A: { She / *It / *That }'s Swedish.

(Mikkelsen 2005:64-65)

このことは、指定文の主語名詞句と指定文の主語名詞句の意味タイプが異なることを示す。*it* や *that* は、(18)、(19)に見られるように、性質を表す叙述名詞句を照応する際に用いられるものであることから、Mikkelsen は、同じ代名詞が用いられる指定文の主語名詞句を、叙述名詞句であると考えるのである。

- (18) He is a fool, although he doesn't look { it / *him } . (Mikkelsen 2005:65)

- (19) They say that Sheila was [beautiful] and she is that. (Mikkelsen 2005:68)

さて、倒置指定文も指定文も共に、指示的な名詞句と、非指示的な名詞句である叙述名詞句を含むとする主張のもとで、Mikkelsen はこれらの文の意味構造の違いをどのように説明するのであろうか。次の例を見よう。Mikkelsen は、コピュラ文の曖昧性を考慮せず、専ら語

順によって *specificational* / *predicational* の区別を行っている。彼女が *specificational* と分類するのは、我々のいう倒置指定文の語順をもつもののみである。

(20) Q: Who is the winner?

A1: The winner is JOHN. (*specificational*)

A2: JOHN is the winner. (*predicational*)

(21) Q: What is John?

A3: # The WINNER is John. (*specificational*)

A4: John is the WINNER. (*predicational*) (Mikkelsen 2005:160)

Mikkelsen によれば、主語の位置の名詞句が指示的であり、述語の位置の名詞句が非指示的である A2 と A4 は、いずれも措定文ということになる。実際には、A2 は、指定文であるが、この区別を示すことができないのは、Mikkelsen の議論の大きな問題点である。(20)、(21) の観察をもとに、Mikkelsen は、“*specificational sentences*” には、常に主語名詞句が *topic*、述語名詞句が *focus* でなければならないという情報構造上の制約があると論じる。倒置指定文の主語名詞句に対して、単に、談話上、旧いものでなければならないという制約を課すだけでは不十分だと考えるのは、次のような例があるからである。

(22) Q: What is John? The winner or the runner-up?

A3: # The WINNER is John. (*specificational*)

A4: John is the WINNER. (*predicational*) (Mikkelsen 2005:160)

the winner が既出の要素であるにも関わらず、それを主語とした倒置指定文 A3 が許されないという事実を、*topic* であるべき主語が *focus* になっているからであると、Mikkelsen は説明する。他方、“*predicational sentences*” にはそのように定まった情報構造はなく、述語名詞句は *topic-focus* の制約に関しては自由であって、A2、A4 に見られる様に、*topic* にも *focus* になりうると Mikkelsen は述べる。

以上の議論から、倒置指定文と措定文を語順だけを手がかりに区別しようとしたために、語順は異なるが共に指定を表す A1、A2 の共通性と、語順は同じだが、一方は指定、もう一方は措定を表し、その意味構造がまったく異なる A2、A4 の相違を、共に Mikkelsen が見逃していることが明らかである。(20) に現れる *the winner* と、(21)、(22) に現れる *the winner* の本質的な違いは、前者が変項名詞句であるのに対し、後者は叙述名詞句であるということである。両者は異なる意味機能をもつものであり、その違いは、情報構造によって捉えられるものではない。倒置指定文の主語名詞句の非指示性を指摘した点は興味深いのが、措定文と倒置指定文の意味構造の分析は不十分であると言わざるをえない。

もう一つ、Mikkelsen の議論の中で注意を引くのは、不定名詞句を主語とする倒置指定文の考察である。倒置指定文の主語名詞句は定名詞句に限られないことを指摘した上で、例えば (23) が容認されないのは、主語が叙述名詞句であるためではなく、Discourse-old⁵ (Prince 1981, Birner 1994) であるような要素を含んでいないためであると、Mikkelsen は主張する。

(23) *A doctor is John.

これに対し、先に挙げた(11)の例においては、主語名詞句自体は先行談話で言及されておらず、Discourse-new であるが、既に文中に何度も登場し Discourse-old な要素である *the Kiparskys* が関係節中に含まれているために、この語順が許容されるのだという。確かに、先行談話とのつながりが強い場合に倒置が起こりやすいというのは、十分理解できることである。しかし、倒置された形が、Mikkelsen が主張するように、必ず倒置指定文と解釈されるべきであるかどうかについては、疑問が残る。(24)、(25)の例を比べてみよう。Heycock (2012)は、(24)が示すように、英語の倒置指定文において *be* 動詞は文頭の名詞句の数に一致することに注目し、主語の位置の名詞句が単数であるにも関わらず *are* を選択する(25)の二番目の文は、倒置指定文と考えることはできないことを指摘している。

(24) The real problem is / *are your parents. (Heycock 2012:213)

(25) Delinquency is a threat to our society. Also a threat {are / *is} factory closing and house reposessions. (Heycock 2012:220)

実際、Mikkelsen が挙げた例の中には、コンピュータの前の名詞句が変項名詞句である倒置指定文なのか、それとも、叙述名詞句が前置された倒置構文なのか、判断が難しいものが多い。⁶ その詳細には立ち入らず、ここでは、以下のように、主語が不定名詞句であっても指定文と解釈される文が存在することを確認するにとどめたい。

(26) {A / One} problem that I came across right at the beginning was that we didn't understand all the parameters. (Heycock 2012:219)

(27) A: Can you give me an example of what we call a *superpower*?

B: An example of a *superpower* is the Soviet Union. (Declerck 1988:21)

西山(2003)は、名詞句の定性と指示性は独立したものであると指摘し、定名詞句が叙述名詞句となる例は示しているが、不定名詞句が変項名詞句となるケースについては、明確な言及をしていない。定名詞句に限らず、不定名詞句も変項名詞句の機能を果たすとした場合に、どのような理論的問題が生じるのか、今後、検討する必要があるであろう。

次に、(倒置)指定文と措定文との関連において説明しようとするもう一つの議論、Patten (2012)を取り上げることにしよう。Patten も、倒置指定文の主語名詞句は、措定文の述語の位置に現れる名詞句と同じ、叙述名詞句であると考え。しかしながら、構文文法の立場をとる Patten は、叙述名詞句が述語の位置にある(28)と、それが主語の位置にある(29)とは別個の構文であるとし、両者を派生によって結びつけることはしない。

(28) John McIntyre is the thoracic surgeon.

(29) The thoracic surgeon is John McIntyre. (Patten 2012:38)

コンピュータの後に叙述名詞句が現れる(28)のような文は、措定文と指定文両方の解釈が可能であるのに対し、語順が逆の(29)のような文は、常に指定としての解釈をもつと考える。

Patten によれば、'X is Y' の措定と指定の解釈の違いは、(30)のように示すことができる

という。

(30) predicational: X is a member of the set Y

specificational: X makes up the complete membership of the set Y (Patten 2012:62)

次の例を見よう。述語名詞句が不定名詞句である(31)も、定名詞句である(32)も、どちらも措定文と解釈される。ところが、*John*が焦点となった場合に、(34)には指定の読みが生じるのに対し、(33)には、指定の読みは生じないと、Patten は述べる。

(31) John is a surgeon. (predicational)

(32) John is the best surgeon. (predicational)

(33) JOHN is a surgeon. (predicational)

(34) JOHN is the best surgeon. (specificational) (Patten 2012:34-35)

この違いを Patten は次のように説明する。(32)の *the best surgeon* は、一つのメンバーしか含まない集合を表す。そのため、*John* をこの集合の一成員であると分類することによって、*John* に *the best surgeon* という性質を帰し(措定)、また、*John* に焦点を当てた場合には、*best surgeon* の集合の全メンバーをリストアップする(指定)ことになる。他方、(31)の *a surgeon* は、多くのメンバーを含む集合を示す。*John* を *surgeons* の集合のメンバーの一人と分類することによって、ジョンに *a surgeon* という性質を帰すことにはなるが、ジョン一人がこの非限定的な集合のメンバーを網羅することはできないので、指定の読みは出てこない。

指定と措定の解釈を語順のみによって区別し、(20)の A2 を措定文とみなした Mikkelsen と異なり、Patten は、(34)が指定文であることを正しく認識している。しかしながら、叙述名詞句が不定名詞句である(33)は指定の読みをもたないとする Patten の指摘は、正確さを欠くものである。以下の例を見よう。

(35) Is there any surgeon around? – JOHN is a surgeon.

(36) Who is a surgeon? – JOHN is a surgeon.

(37) Which one is a surgeon? – JOHN is a surgeon.

それぞれの問いに対する答えである *JOHN is a surgeon* は、日本語では、「ジョンは外科医だ」ではなく、「ジョンが外科医だ」と訳されるものであり、指定文であると考えることができる。もしそうであるならば、指定の解釈の有無を、叙述名詞句の定性と結びつける議論には問題があるということになる。

もとより、コピュラ文の解釈は、集合の概念によって捉えることができないものである(西山 2005、熊本 2005)。措定文を集合とそのメンバーの関係で規定すると、(38)のように集合とその真部分集合の関係を表す場合を扱うことができない。

(38) Whales are mammals.

鯨は集合であって個体ではないので、哺乳類の集合のメンバーではなく、したがって(38)は措定文ではないことになる(cf. 西山 2003)。また、措定文(39)における *the current President of the United States* は、集合論でいう個体であり、あえて単元集合という必要のないものである。

(39) Barack Hussein Obama II is the current President of the United States.

さらに、(40)は主語名詞句を指示的に解釈すれば、ある胸部外科医に、ジョン・マッキンタイアという名前の持ち主であるという性質を帰す措定の読みがでてくるが、

(40(=29)) The thoracic surgeon is John McIntyre.

この場合も、*John McIntyre* の集合を考えるというのは、無理があるように思われる。

Patten は、(倒置)指定文を、文中の指示的名詞句に焦点が置かれ、述語名詞句が限定された集合を表わすという特徴をもった、措定文の特殊なケースと考えているように見受けられる。集合の概念によって措定文と(倒置)指定文の解釈を統一的に説明できるとしているが、措定文の場合にはある集合に属するという性質を叙述し、(倒置)指定文の場合にはある集合に属する要素の列挙を行うのであれば、両者の意味構造は大きく異なると言わざるをえない。それぞれの場合に、非指示的名詞句は全く異なる意味機能を果たしているということに、注意しなければならない。Patten の議論は、Mikkelsen の議論と同様、「変項名詞句」の概念を欠くために、異なるタイプの非指示的名詞句を区別することができず、措定文と(倒置)指定文の意味構造の分析も不十分なものとなっている。

III. (倒置)指定文と(倒置)同一性文

今度は、(倒置)指定文を同一性文の一種と捉える立場について、考えてみることにしよう。この立場では、最初に挙げた(4)のような典型的な(倒置)同一性文の場合とは異なり、(倒置)指定文においては主語名詞句と述語名詞句が非対称であることを、どのように説明するかということが問題となる。

ここでは、Heycock and Kroch (以下 H & K) (1999) の議論を取り上げることにしよう。Moro (1997) は、倒置指定文が小節に現れないのは、主語の位置の名詞句が、繰り上げられた述語であるためであると主張する。措定文からの派生を考えることによって、倒置指定文の主語の位置の名詞句が非指示的な解釈をもつことが説明でき、また、分類上、コピュラ文の種類を増やさなくて良いという点で、経済的でもあるという。これに対して、H & K は、倒置指定文の主語位置の名詞句を、倒置された述語とみなすことはできないと論じる。(41a)、(41b)を比較してみよう。標準的な語順をもつのは(41a)の方であり、(41b)は倒置された形であると考えることができる。

(41) a. One hundred yen is the best value for the dollar.

b. The best value for the dollar is one hundred yen. (H & K 1999:373)

なぜなら、(41a)は小節に現れることができるが、(41b)はそれが不可能であるからである。

(42) a. The banks consider one hundred yen the best value for the dollar.

b. *The banks consider the best value for the dollar one hundred yen.

(H & K 1999:373)

ところが、倒置指定文の主語の場合と同様、名詞句の非指示的な解釈は、(43a)が示すように、変化を表わす動詞の主語の位置でも可能である。

(43) a. The best value for the dollar has changed—

b. —it used to be one hundred and thirty yen, but now it is only one hundred.

(H & K 1999:373)

(43a)においては、主語が基底では述語であるような派生を考えることができない。このような例の存在は、名詞句の非指示的な解釈が、必ずしも、述語の位置と結びついたものではないことの証拠になると、H & Kは述べる。

さらに、H & Kは、次のような例を挙げ、主語位置の要素が、コピュラの後の要素について叙述を行っているとししか解釈できない場合、その文は非文法的であることを示す。

(44) a. John is proud of his daughters.

b. *Proud of his daughters is John.

(45) Proud of his daughters is what he is.

(46) a. John is the one thing I have always wanted a man to be (that is, he's honest).

b. *The one thing I have always wanted a man to be is John.

(47) The one thing I have always wanted a man to be is honest. (H & K 1999:379-380)

(44b)、(46b)と異なり、(45)、(47)が容認可能なのは、コピュラの前後の要素が共に性質を表わしており、それらの同一性を主張するという解釈が可能なためであるという。

倒置指定文の文頭の名詞句が、措定文に現れる叙述名詞句とは異なる性質をもつものであることを示し、変化を表す動詞の主語の位置に現れる名詞句と同種のものであることに言及しているのは、非常に興味深い(cf. 西山 2003)。⁷しかし、H & Kが、(倒置)指定文を同一性文のタイプとしてどのように規定するのかという重要な点は、明確にされていない。H & Kは、(45)、(47)に関しては、二つの「性質」の同一性に言及するのに対し、(48)に関しては、二つの「個体」が同一であると述べる。

(48) Fiona's only purchase was that ancient dictionary.

(H & K 1999:382)

(倒置)指定文においては、コピュラの前後に意味的、統語的に同じタイプの名詞句が現れるというが、それでは、彼らが同一性文の一種であるとする(49b)の倒置指定文は、(49a)のような「真の同一性文」(“true equatives”)(H & K 1999:380)から、どのように区別されるのであろうか。

(49) a. Your attitude toward Jones is my attitude toward Davies.

b. The most serious problem is your attitude toward Jones.

(H & K 1999:381)

ここで、H & Kは、focus-ground という談話上の概念を導入する。談話のコンテキストの背景である open proposition が ground、その変項を埋める値が focus である。倒置指定文のコピュラの前後に現れる名詞句の間の非対称性は、主語と述語の違いによるものではなく、一方が ground、もう一方が focus を表すという、情報の違いによるものであると H & K は

説明する。倒置指定文の一タイプである疑似分裂文も、同一性を表わすものであり、(51)のように、「変項を埋めよ」という指示を含むという。

(50) What John hit was Fido.

(51) Assign to the variable x in the expression “John hit x” the value “Fido.”

(H & K 1999:393-394)

このように倒置指定文の意味構造を分析し、先に見たように、(41)の *the best value for the dollar* が非指示的であることを示したにもかかわらず、H & Kは、名詞句には、それ自体、変項を含むという特性をもつものがあるという考えには至らない。(49)においては、コンピュータ前後の名詞句の主要部名詞が同一であるか否かという観点から、「真の同一性文」と倒置指定文を区別しているようであるが、「真の同一性文」とされる(49a)も、名詞句の解釈の仕方によっては、(倒置)指定文と読むことが可能である。⁸ (52a)、(52b)は、コンピュータの前後の名詞句をいずれも指示的名詞句と解釈した場合、(52c)は、主語名詞句を変項名詞句、述語名詞句を指示的名詞句と解釈した場合、(52d)は、主語名詞句を指示的名詞句、述語名詞句を変項名詞句と解釈した場合に出てくる読みである。

(52) a. あなたのジョーンズに対する態度は、私のデービーズに対する態度と同一である。

(倒置同一性文)

b. あなたのジョーンズに対する態度が、私のデービーズに対する態度と同一である。

(同一性文)

c. あなたがジョーンズにどういう態度をとるかという、私のデービーズに対する態度が、そのまま、あなたのジョーンズに対する態度になる。(倒置指定文)

d. 私がデービーズにどのような態度をとるかという、あなたのジョーンズに対する態度が、そのまま、私のデービーズに対する態度になる。(指定文)

こうした名詞句の文中における意味機能の違いを考慮せずに、コンピュータ文のタイプを考える H & K の議論には、難点があることが明らかである。

IV. 結語

本稿では、(倒置)指定文の意味特性を、措定文と関連づけて論じた Mikkelsen (2005)、Patten (2012)、(倒置)同一性文と関連づけて論じた Heycock and Kroch (1999)の議論を概観し、それぞれの問題点を指摘した。いずれも、名詞句が文中で果たす意味機能に対する考察が不十分であり、情報構造や集合概念による説明は、成功しているとは言いがたい。常に、固有名詞が指示的名詞句、定名詞句が変項名詞句、不定名詞句が叙述名詞句と対応するわけではなく、コンピュータ文の解釈を考える際には、文中において、コンピュータの前後の名詞句がどのような意味機能を果たしているのかということを理解することが大切である。(倒置)指定文の意味構造を正しくとらえるためには、変項名詞句の概念が不可欠であると思われる。不

定名詞句が文頭に現れた倒置指定文をさらに広く、名詞句、形容詞句、前置詞句、動詞句が倒置された構文との関係でどのように説明するべきか、という課題が残されたが、この点については、また稿を改めて論じることとしたい。

* 本研究は、平成25年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(C)「焦点化構文の意味機能に関する研究」(課題番号:24520433)(研究代表者:熊本千明)の助成を受けたものである。有益な助言を下さった西山佑司先生、例文のチェックをして下さった Gregory K.Jember 氏に謝意を表する。

註

1. 指定文は倒置が可能であるが、どちらの形がより基本的であるかについては議論がある。ここでは、上林(1988)、Declerck(1988)にならい、取り上げた著作の著者の用語に関わらず、(i)の語順をもつものを指定文、(ii)の語順をもつものを倒置指定文と呼ぶことにする。
 - (i) a. John Thomas is the bank robber.
b. ジョン・トーマスが銀行強盗だ。
 - (ii) a. The bank robber is John Thomas.
b. 銀行強盗はジョン・トーマスだ。(Declerck 1988:6)
2. 以下の例が示すように、値表現は必ずしも指示的名詞句に限られないことを、西山(2003、2013)は指摘している。
 - (i) この種の実験で一番大切なことは、その実験室の温度だ。(西山2003:39)
下線部の名詞句は、疑問の意味を表す非指示的な名詞句(後述の変項名詞句)である。
3. 帰属用法の定名詞句と変項名詞句の違いについては、Nishiyama (1997)、kumamoto (1993)、熊本(2013)に詳しい議論がある。
4. 他に、倒置同定文、(倒置)同一性文の解釈も可能であるが、ここでは立ち入らない。
5. Prince (1981)では、ある entity が Discourse-old となるのは、談話モデル内で言及された場合、談話モデル内にある他のものから推測可能である場合、談話が行われている状況の中で際立ちをもつ場合であるとされる。談話モデル内にない entity は Discourse-new である。
6. これは、倒置指定文ではなく、提示文の例と考えることができるかもしれない。提示文の「焦点」と倒置指定文の「値」との違いについては、熊本(2000、2006)を参照のこと。
7. Fauconnier (1985)が役割と値という概念を用いて説明した(i)の二つの解釈を、西山(2003)は、変項名詞句と指示的名詞句の区別によって説明する。*the food* を変項名詞句と解釈すると、その変項を埋める値が変化するという(ii)の読みが、指示的名詞句と解釈すると、その個体が変化するという(ii)の読みが、出てくる。
 - (i) The food here is worse and worse.(Fauconnier 1985:40)
 - (ii) a. The food served this week is worse than the food served last week.(入れ替わりの読み)
b. Some particular food in the cupboard is rotting away.(変貌の読み)
8. 上林(1988:68)は、(i)の文は曖昧であり、
 - (i) 私の意見は党の意見です。
「私は党の意見に従う」(私の意見はどれかということ、党の意見がそうである)という倒置指定文

の解釈と、「今述べた私の意見は、党の意見を代表する」（私の意見は、党の意見という性質をもつ）という措定文の解釈が可能であることを指摘している。

参考文献

- Birner, Betty J. (1994) "Information status and word order : An analysis of English Inversion," *Language* 70(2): 233-259.
- Declerck, Renaat (1988) *Studies on Copular Sentences, Clefts and Pseudo-Clefts*. Leuven : Leuven University Press.
- Donnellan, Keith S. (1966) "Reference and definite descriptions," *The Philosophical Review* 75 : 271-304.
- Fauconnier, Gilles (1985) *Mental Spaces*. Cambridge, Mass. : MIT Press.
- Heycock, Caroline and Anthony Kroch (1999) "Pseudocleft connectedness : Implications for the LF interface level," *Linguistic Inquiry* 30(3): 365-397.
- Heycock, Caroline (2012) "Specification, equation, and agreement in copular sentences," *Canadian Journal of Linguistics* 57(2): 209-240.
- Heller, Daphna (2005) *Identity and Information : Semantic and Pragmatic Aspects of Specificational Sentences*. Ph. D. diss., The State University of New Jersey.
- Higgins, F. Roger (1979) *The Pseudo-cleft Construction in English*. New York : Garland Publishing.
- 上林洋二 (1988) 「指定文と措定文 ― ハとガの一面」『筑波大学文藝言語研究 言語編』14:57-74.
- Kumamoto, Chiaki (1993) "The referential / attributive distinction and the classification of copular sentences," 福岡言語学会・編『言語学からの眺望』175-189. 福岡:九州大学出版会.
- 熊本千明 (1995) 「同定文の諸特徴」『佐賀大学教養部研究紀要』27:147-164.
- 熊本千明 (2000) 「指定文と提示文」『佐賀大学文化教育学部研究論文集』5(1):81-107.
- 熊本千明 (2005) 「コピュラ文における名詞句の意味機能について」『佐賀大学文化教育学部研究論文集』9(2):147-164.
- 熊本千明 (2006) 「指定文と提示文の特徴について」『佐賀大学文化教育学部研究論文集』10(2):117-129.
- 熊本千明 (2013) 「帰属的用法と *Whoever* 節の機能」西山佑司・編著(2013)『名詞句の世界』341-366. 東京:ひつじ書房.
- Mikkelsen, Line (2005) *Copular Clauses*. Amsterdam / Philadelphia : John Benjamins.
- Moro, Andrea (1997) *The Raising of Predicates : Predicative Noun Phrases and the Theory of Clause Structure*. Cambridge : Cambridge University Press.
- Nishiyama, Yuji (1997) "Attributive us and non-referential NPs," in Masamoto Ukaji, Toshio Nakao, Masaru Kajita, and Shu Chiba (eds.), *Studies in English Linguistics, A Festschrift for Akira Ota on the Occasion of His Eightieth Birthday*, 752-767. Tokyo : The Taishukan Publishing Company.
- 西山佑司 (1988) 「指示的名詞句と非指示的名詞句」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』20:115-136.

- 西山佑司（1990）「コピュラ文における名詞句の解釈をめぐって」『文法と意味の間 ― 国広哲弥教授還暦退官記念論文集』 133-148. 東京：くろしお出版.
- 西山佑司（2003）『日本語名詞句の意味論と語用論』 東京：ひつじ書房.
- 西山佑司（2005）「コピュラ文の分析に集合概念は有効であるか」『日本語文法』 5 (2):74-91.
- 西山佑司・編著（2013）『名詞句の世界』 東京：ひつじ書房.
- Patten, Amanda L. (2012) *The English It-Cleft, A Constructional Account and a Diachronic Investigation*. Berlin / Boston : De Gruyter Mouton.
- Prince, Ellen F. (1981) "Toward a taxonomy of given-new information," in Peter Cole (ed.) *Radical Pragmatics*, 223-255. New York : Academic Press.